

平成13年度 国土技術政策総合研究所研究評価委員会合同分科会 議事要旨

1. 日 時：平成14年3月22日（金） 10:00～12:00
2. 場 所：弘済会館（椿の間）
3. 出席委員：森杉分科会長、小澤委員、日下部委員、熊谷委員、佐伯委員、辻本委員、根本委員
4. 議事次第
 - (1) 開会
 - (2) 所長挨拶
 - (3) 議事
 - 1) 技術政策研究の方向性について（フリーディスカッション）
 - (4) 所長挨拶
 - (5) 閉会
5. 議事要旨

「国総研での最近の議論」（資料2参照）、「美しい国土の創造」（別添資料参照）について、説明を行った後、委員から意見を頂いた。

<注> 委員からの意見 国総研の回答

社会情勢は変化し、それに伴い価値観も変化していくので、現時点で評価されているものが、20年後には評価されないこともありえる。そういう意味で、美しい国土について議論をしていくときに、何をもちょう美しいとするのかといった基本的な考え方を定めておく必要があると思う。

また、地域ごとに美しさは変わってくると思うので、長期的、かつ全国ベースで担保される価値、あるいは美しさの概念とともに、地域ごとの概念についてもある程度定めることが必要であると思う。

街の美しさについて、土木分野の者だけで議論ができるのだろうか。芸術分野等、他分野の方の多様な美的感覚を尊重していくべきで、我々だけの意志だけでは十分ではないと思う。

例えば、文京区や船屋のある漁村の美しさについては、両者の作られた時期に100年ぐらいのタイムラグがあるわけで、価値観は変化していくという話からすると、判断がつかなくなるということになる。また、何故、ロンドンはきれいで、文京区は汚いとされるのかについても理解できない。このようなところから、議論を始めないと答えは出てこないと思う。

すぐに容積率とか、道路斜線がどうだとかのディテールの議論になってしまい、それもおかしいと思う。

財政的な余裕がなくなり、維持管理、更新がままならない時代になれば、維持管理、更新が無理なく出来る、安く出来るというものが、サステナブルで美しいとなるのではないかと思う。

美しい国土の創造について検討するに当たっては、効率性、利便性、安全性、あるいは、環境の保全といった多様な側面、切り口による整理が必要であると思う。また、土木というよりは、シビル・エンジニアリングといった広範の目で、パブリックに対して何をどのようにしていくのかといった国土マネジメント計画を、地域ごとに検討していくような機運をつくってほしい。

子供、働く世代、高齢者とそれぞれの価値で「美しさ」は変わると思うので、このような議論を国民各層で広めていくきっかけとして、単にコストだけの議論ではなく、我々が誇りを持てる国

土とは何かというような議論を喚起していく必要があると思う。

これらの研究テーマを、仮に国総研でやるとして、それらがどのような形で世の中に貢献するのか問いたい。国総研が何故、この研究するのかということ意識する必要もあると思う。

「美しい国土」の目標像（規範）に関する考え方については、特に美学や哲学等の分野で研究されている可能性があり、既存の研究を徹底的にフォローアップする必要があると思う。このテーマを研究テーマとすべきかどうかを検討する前に、徹底的にサーベイするしかないのではないかと。

幅広く、かつ、多くの議論があるこれらの3つテーマについて、その結論を決めつけることは適切なことではないかもしれないが、まず、価値観は多様であることを認めた上で、国民が受けている情報が偏っているかもしれない、より幅の広いレンジがあるかもしれない、あるいは、顕在化していない軸、規範があるかもしれないと問題提起をして、工学以外の知見も含め、そのレンジはどのようになっているのかについて研究を進め、世界的な潮流や歴史的な潮流の中で、我々がどのようなところに立っているのかといったことを提示していきたいと思う。

技術者はこれまで、いかに早く安くつくるかということに専念してきたが、国民が今知りたいのは、そもそもそれは本当にいるのかどうかといった根本的なところであり、そうであればB/CのBを上げるか否かという議論だけでは、耐えられない状態が来ているということであると思う。そういう意味から、もう少し、哲学や理念の方へ踏み込んでいくべきであるということになる。これらのテーマについての哲学論を発表するということは多分できないと思うが、個別の具体的な研究において、政策展開を考えると、こういうことが問題であると思う。そして、物事をより上流側から捉える意識を持つということが重要であり、そのような研究のプロセスを大事にしていく必要があると思う。

我が国のインフラストック自体がどういうものであるかといったデータベースを構築し、国民が知りたいときに得られるように、国総研が整備していくべきであると思う。

国土交通省が公共工事の事業実施者であるという立場がある限り、それをサポートするという役割が国総研にあると思うが、川上のソフトな部分の研究については、これまでやりにくい状況にあり、蓄積がないと思うので、国総研として、どういうスタンスでどういうふうにしていくのかを、あらかじめ考えて、例えば現状の制度ややり方はこうであるが、国総研としては将来こういう方向へ進むべきであるといった提案ができればいいのではないかと。

資料2の と は、国土なり生活空間なりのビジョンを示していくべきであるという考え方ではないかと思う。 において、「美しい」というのは、視覚的な美しさだけでなく、活力が満ちていて、それがある種の精神的な美しさになっている、あるいは障害者の方々が社会に出てこられる等といった民主主義を体現しているということでもいいのではないかと。

また、 が、世の中全体を俯瞰したような形で、付託を受けた行政側として責任を持って国民に問題提起をしていくべき課題である一方、 が、国民一人一人の目から見た、生活者の目から見た国土なり、生活空間なり、あるいは国民から見た我々の施策についての評価なりを謙虚に捉えていく必要があるという課題であると思う。 は、美しい国土の創造・ビジョン、あるいは生活者の目から見た生活空間・国土ビジョンを実現し、維持していく上での方法論で、財政負担を含めどのように国民の負担、協力を求めていくかというような課題であると思う。

美しい国土、あるいはゆとりの感じられる生活については、昔から国民が求めていることであり、急に今、求められているわけではない。財政的な状況や地球環境問題への対応等の制約条件が変わってきたので、その答えの出し方も違ってくるということであると思う。そういう意味では、美しい国土とは何か、といった根源的な問いをどこまで意識するのか、国民がその答えを国総研に出すように求めているのかについては検討する必要がある。

むしろ、国民は、高速道路や都市内道路をどのように運営していくのかといった技術的な目標が、現代に合っているのかどうかといったことを国総研に聞きたいのかもしれない。

さらに、国民に迎合するだけが国の役割ではなくて、国として、どのようなスタンスで、国民にビジョンを示していくのかということが重要であり、以前作った目標を見直す必要があるときに、それを新しい目標として、国民に提示し、説得していくことが国の役割であると思うので、そのような議論をしてほしい。

美しい国土については、美学の世界でもあまり議論されてないと思う。それがニーズとして出てきて、建築、土木がこの仕事を独占しなければ、必ず街はどうすべきかという議論になる。現状は、たまたま建築・土木が独占して、同じパターンで整備してきているので、誰も何も言わないということであると思う。

「美しい」というのは昔から言われているが、これは何も言わないのに等しいから、このような問題提起そのものが問題ではないかという意見、一方、「美しい」に対しての問題提起には価値があり、それについては、実は意外と研究されていないという意見があった。これらの問題提起をどのように考えるかということが議論されるべきであると思う。

のユーザーオリエンテッドの評価軸について、社会資本整備の基本的な考え方やストックがどのように役立つのかといった評価が今まで限定的だったのではないかと、また、評価に値しないような指標で評価をしていたのではないかと思う。本来、ストックというのは、それによって、経済活動なり文化活動なり人々の生活なりを変えていくはずであるから、それをしっかりと評価しなくてはいけないのではないかということを中心にここで議論し、ひいては、例えば、道路のネットワークはどういうボリューム、あるいはどういう質でなければならないかと具体的に提示をしていきたいと思う。これらのテーマは、これからの国土づくりをどのように考えなければならないかということからスタートしている。昨今では、1万4000キロの高速道路がいる、いらぬといった議論にすぐ入ってしまうが、本来の国土づくりというのはそうではないのではないかという問題提起をした上で、美しく、豊かな国土とはどのようなものか、これを支える住宅・社会資本というのは何なのか、あるいはその評価はどのようにするのかということが、この3つのテーマの狙いであると思う。

「美しさ」とは何かという論点はあるが、これらをブレイクダウンした具体的な研究テーマの方向についても列挙すべきではないか。例えば、歩道の評価のあり方、B/Cのあり方、街路をどのように考えるか、東京湾について景観という観点からの美しさをどう考えるかといったことから、シビック空間のデザインに焦点を当てた研究の方向性というものが出てくるのだと思う。

「美しい」ということについては意外と研究されていないことから、また、それらが土木、建築の分野で独占されてきたことが問題ではあるけれども、その分野の先生方の問題提起や評価と連動する形で、テーマ設定をしていくことも一つの方向性ではないかと思う。

3つのテーマについては、プロジェクト研究というより、国総研の大きな顔であるということにしたい。美しい国土の創造のテーマに関連して、3つのプロジェクト研究を進めているが、何か抜けないか等研究のエンベロープを認識しつつ、この部分は従来の研究をモディファイする、あるいは、お話しのあった歩道のあり方等具体的に突っ込んで研究してみるといったことを検討する場としたい。

個別の課題と直接、連動しないような形でのインディペンデントなテーマとするという方向で、現在、考えているということと理解する。

添付資料にある活動体系について、このようなテーマのように非常に概念的、哲学的なことを考えるに当たっては、美学等の文科系の方とともに、何十年間後に世の中を支えなければならない若い方の考え方をいかに取り込むかということが重要になると思う。

また、長期的なスパンの中での方向性について考えることに加えて、人間の価値観は、すぐに変わるという前提のもと、例えば5年、10年と節目ごとに、これまで歩んできた道が正しいのかどうかを常に振り返り、また、先を見据えながら、方向を徐々に変えていくという体制をとってほしい。

プロジェクトになる前の、全体の傘を作るという段階であったので、今後は、自分から進んでやりたいという人間を巻き込んでいくべく、本日、お示しした資料を提示し、若い研究者を含め、研究希望者を随時募集していきたいと考えている。

この研究を進めるに当たっては、地形等の環境を考慮したアジアという視点を導入してほしい。

世界で一番美しい風景の一つは、日本の山と渓谷、特に山の渓流だと思う。アジアの美しさというのはそういうところではないかと感じている。

棚田は、フィリピンにもあるし、アジアの美しさと言えると思う。また、ヨーロッパではあり得ないことなので、これらのどこかに「美しさ」のコンセプトがあるのではないかと思う。

プロが見ると、地域ごとに、例えば土が違う、水が違う、生きているものが違うといった色々な違いが多くあるという。そのような違いも、もっと売りにしていったほうがいいのではないかと思う。富士山の大沢と砂防工事、あるいは、天の橋立等の国土保全には、多くの税金が投入されており、再評価の対象にもなっている。そこでの住民の意見としては、国土保全は本当に必要なかや無駄遣いではないかという意見が出てくる。その答えとして、私は「やはり必要ではないか」と言うのだが、その根拠が非常に大きな問題になっていると思う。こここのところは、国民の中でも意見が割れているところではないかと思う。

また、事業官庁として、B/Cについて検討することは、技術的な問題でもあり、重要であると思う。これらは、大学でやるべきということではなく、ある一定の基礎理論が存在し、応用的なところがあり、政策とも連動するので、現場のデータや知識を保有している国総研の重要なテーマであると思う。

「美しい国土づくり」という言葉について、国土づくりというよりも、セラピーではないのかと思う。社会環境マネジメントといったこれからの国土全体をどうにかして、やりくりしていくという表現の方がいいのではないか。

別添資料の の地域の特性を生かした「ものづくり」のあり方にあるように、国土の実態（景観

等)について、どういう場所に、どういうものが、どういう状況であるのかということや、砂防、洪水、地震の話等災害の観点から言うと、現状の危険性、あるいは、それが起こったときにどうなるかといったハザードのようなものを、国民一人一人、あるいは地域の人一人一人がわかるような情報として、ビジュアルに提示していくことが必要であると思う。ひいてはこれらが、国民自分達が住んでいる郷土なり、あるいは地域をどのようにしたらよいのかということを考えさせるようになると思う。

「づくり」という言葉は、一種の総合であると思う。何か新しく物をつくるだけが主ではなく、改変したり、あるいは、維持したりすることを含んでいるという意味であると思う。

「マネジメント」については、「やりくり」という言葉に言いかえている。

人事交流等、人間の異動をもっと活発に活用していけば、色々な視点からの研究が出来る可能性が増えると思う。

任期付き研究員制度がある。本委員会を含め、あらゆる機会を通じて、情報交換をしていきたい。民間との交流は、重要であると思う。美しい環境や豊かな環境については、民間デイベロッパーが、多くのノウハウを持っていると思うし、また、役割分担として、政府が供給すべきか、民間が供給すべきか、ということも大きなテーマであると思う。

さらに、組織の中の一員として事業官庁の傘の中で公式見解を述べたり、指標を作ったりすることと、研究者個人として、民間を含め様々な人と交流したり論文を書いたりすることを、うまくバランスさせるといいと思う。

別添資料の活動体制にあるように、今後、国総研、大学、NPOによるワーキンググループの設置等をしていくが、現行の任期付き研究員制度、共同研究制度も十分、機能していると思う。多くの分野の方に参加してもらえるようなシステムをフル回転しながらやっていきたい。

大学との人事交流は、今後、加速していく方向だと思うが、大学での現在の人事では、研究成果がどうなっているかということが最大のポイントであり、具体的には、どれだけ査読付き論文やジャーナル、学会誌に論文を投稿しているかが重要な業績となる。そういう意味で、人事交流を進めるに当たっては、この研究は、個人のものとして、論文を書いてもいいというようなことを、念頭に置いてほしい。

また、委託研究における成果の取り扱いについても同様に検討してほしい。

例えば、100メートル道路については、反対側の街並みが見えなくなったり、通過交通となり街は死んでしまうといった問題がある。また、防災上も必要とは思えない。そういう意味で、それがどのように評価されるのかということが学問的に行われているのかどうか疑問である。

また、「美しい国づくり」をブレイクダウンしてくると、結局、道路をつくる側と都市を運営する側との接点のところで、土木の中でも随分、区分けがあって、お互いに調整していないのではないかという気がする。

街路のあり方や構造がどうあるべきかというような研究は、いろいろと行われている。100メートル道路のあり方についても、景観の観点からも研究はなされている。それから、ネットワーク構造の観点からも、交通量の流れからの研究というものもある。さらには、地球温暖化問題とも連動して、交通量をどのようにするのかといった研究もスウェーデン等で盛んにされていると思う。